

1995年7月1日

## ディケンズ・フェロウシップ ニュースレター

雨量が多い今年の梅雨でございますが、みなさま、おげんきでいらっしゃいますか。さて、春季大会のご報告をかねて、以下の通りご連絡いたします。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会は、1995年6月3日午後1時30分より、京都大学の京大会館を会場として開催されました。プログラムは以下の通り。

1. 小池滋支部長より開会の挨拶があり、以下の二点について報告があった。
  - (1) 本年度の大会は1995年10月14日(土)に、東京女子大学現代文化学部にて開催の予定。プログラムは未定ですが、ふるってご参加ください。
  - (2) 本部より送付されるはずの94年度の *Dickensian* が一部未着であるため、会員への送付が遅れています。ただいま問い合わせ中ですので、今しばらくお待ちください。
2. 研究発表は佐々木徹氏(京都大学)の司会のもと、次の二名の方の発表があり、いずれも示唆に富む内容だった。発表の要旨は本年度の『ディケンズ・フェロウシップ会報』に掲載される。

(1) 田辺洋子(広島経済大学)

*'Mutuality' in Our Mutual Friend*

(2) 崎村耕二(高知大学)

*Great Expectations* における階層と職業 「輪」と「層」の観点から

3. マイケル・スレイター先生の講演および朗読は、松村昌家副支部長の司会で始まり、まず *Everyman Dickens* の総編集を担当されているスレイター先生の最近のご活躍が紹介された。

Professor Michael Slater (London University):

“Creative Anger, Creative Pity”

スレイター先生はブリティッシュ・カウンシルの招きで来日され、十六年ぶりにみる日本とのこと、今回の講演は“Dickens explored the relation between a novelist and a journalist.” に始まる、たいへん興味深いものであった。暫時の休憩のあと行われた朗読会では、“quality of his writing”を紹介したいと述べられ、“A Happy Family”や“A Walk in a Workhouse”などが朗読された。

会場に百脚ちかく用意した椅子がほぼ満席になるほどの盛況だった。大会後に開かれた懇親会にも数十名の会員が友人などとともに集い、なごやかな一時をもつことができた。今回の大会にご尽力くださった京都大学と同大学の佐々木徹氏に、厚くお礼申し上げます。